

オランダにおけるピースフルスクールの授業づくりに関する教育方法学的考察 ー日本での授業づくりに活かすためにー

A Study on the Lesson of Peaceable School in the Netherlands Developing “Peaceable Lessons” in Japan

奥村 好美* 萩野 奈幹**
OKUMURA Yoshimi HAGINO Namiki

本稿では、オランダのピースフルスクールの授業づくりを教育方法学的に考察することで、日本における授業づくりに活かすための足がかりを得ることを目的とした。そのために、まずは教育目標・教材・教具、指導過程・学習形態、教育評価の4つの視点でピースフルスクールの授業づくりについて考察を行い、それぞれにおいて重視されていることを整理した。次に、1つの試みとして、先述した4つの視点をふまえて日本での授業案を提案した。その結果、日本での実践にあたってのポイントや留意点を指摘できた。①日本でピースフルスクールのような授業を実施するためには、形式だけ真似をするのではなく、理念を参照しつつ、子どもたちに願う姿をもとに授業を柔軟に組み立て、子どもたちの生活とつなげていくことが重要であること、②特定の価値を教え込もうとするのではなく、一人ひとりに違いがあることを尊重しつつ、共に生きるあり方を学べるようにするという理念をもとに、参考にできる枠組みを参照すること、③子どもたちだけでなく、教師自身も子どもに求める振る舞いを日々の指導の中で体現できているかを自問することが重要であると考えられた。以上のような形で授業づくりを行うことによって、オランダのプログラムの理念等を尊重しつつ、日本の子どもたちに合う授業づくりの道が開かれるように思われた。

キーワード：ピースフルスクール、ピースフルレッスン、オランダの教育

Key words : Vreedzame school (peaceable school), peaceable lesson, education in the Netherlands

1. はじめに

本稿では、オランダのピースフルスクールの授業づくりを教育方法学的に考察することで、日本における授業づくりに活かす足がかりを得ることを目的とする。オランダのピースフルスクール (Vreedzame School) とは、社会的コンピテンシーや民主的市民性を育成するための主に初等学校向けのプログラムである¹⁾。ニューヨークで開発された「コンフリクトを創造的に解決するプログラム (Resolving Conflict Creativity Program)」をもとに、ユトレヒト大学 (Universiteit Utrecht) のデ・ヴィンター (de Winter, M.) 教授の協力等を得ながら、教育サポート機関のエデュニク社 (Eduniek) が開発を行った。

このプログラムの特徴は、大きく3つにまとめられる。一つめは、週に一度プログラムにもとづく授業が実施されていることである。本稿では、この授業のことをピースフルレッスンと呼ぶ。二つめは、メディエーター (けんか等の仲裁をする人) の育成である。ピースフルスクールでは、高学年の子どものうち希望者が学外で研修を受け、メディエーターの資格を取り、子ども同士の衝突が起きた際に仲裁を行う。三つめは、こうした取り組みを、地域を巻き込んで実施していることである。場合によっては、地域の人や保護者が研修を受けることもある。

これらの3つは互いに大きく関わっており、切り離すことはできない。しかしながら、研究の第1段階として、本稿では、ピースフルレッスンと呼ばれる授業づくりの側面に焦点を当てて考察を行いたい。

本プログラムは、日本にも紹介され、実践も行われてきている。例えば、リヒテルズ直子は、ピースフルスクールプログラムの授業や研修の様子などを含むプログラムの全体像を具体的に紹介している²⁾ また、奥村好美は、ピースフルスクールがいかに関心やその教育の質を評価、改善しているかに焦点を当てて、分析している³⁾ さらに、熊平美香は、オランダのピースフルスクールプログラムを紹介すると共に、日本版に再開発し、日本での取り組みを進めている⁴⁾

このように、オランダのピースフルスクールについては、すでに日本に紹介されており、日本版にアレンジされたピースフルスクールプログラムの取り組みも実施されている。このことから、日本での関心が高まっているといえる。しかしながら、プログラムの概要的な紹介及び最初からアレンジされたプログラムの提供のみでは、日本の教師たちがオランダのピースフルスクールプログラムの理念や考え方を活かして子どもたちに市民性を育成したいと願っても、目の前の子どもたちに応じた授業

* 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース 講師

** 兵庫県加古川市立別府小学校

平成30年4月25日受理

づくりを行うことに困難を伴う恐れがある。

そこで、本研究では、オランダのピースフルスクールにおけるピースフルレッスンの授業づくりを教育方法学的に考察する。教育方法学的な考察としては、教育目標、教材・教具、指導過程・学習形態、教育評価の4つの視点で⁵⁾ 考察を行う。これにより、オランダのプログラムにおける授業づくりで核となる考え方を抽出する。その上で、1つの試みとして、日本での授業案を提案し、日本での実践にあたってのポイントや留意点の整理を行う。それにより、日本においてピースフルレッスンの考え方を活かした授業づくりを行う道を開きたい。

なお、ピースフルスクールプログラムの新しいウェブサイトによれば、ピースフルスクールプログラムは発展

を続けており、例えば高学年のブロック⁶⁾ の内容が一部新しく更新されるなどしている⁷⁾ しかしながら、本稿では、資料の関係上、基本的にピースフルスクールの教師用指導書第4版(2011年版)と、それに合わせてピースフルスクールの旧ウェブサイトの情報にもとづいて分析を行う。

2. ピースフルスクールプログラムの概要

まず、ピースフルスクールでは、クラスや学校は生活コミュニティとみなされる⁸⁾ そのコミュニティで子どもたちは、自分が聞いてもらい、見てもらっていると感じ、「声」を獲得する。また、子どもたちは「民主的な市民」であるとは、何を意味するのかを学ぶ。さらに、ピース

表1 ピースフルスクールプログラムの目標(詳細版)

協議、意見形成 と意思決定	衝突を対処する	コミュニティへ の責任	違いに対してオ ープンである	民主的なリテラ シー
<ul style="list-style-type: none">・見解をもつ・自分の見解を擁護する・他の人に耳を傾ける・異なる見解に立って考える・討論する・見解を変える準備ができている・妥協する・決定したことに忠実である・少数派の見解を考慮する・批判的に考える・情報を集め、批判的に分析する	<ul style="list-style-type: none">・衝突解決の理解と知識・衝突解決の自分のスタイルについての理解・他の人の立場に立って考える・交渉する・ウィン・ウィンの解決を追求する・身体的もしくは精神的暴力を放棄する・仲裁の知識・仲裁の技能・衝突の際の怒りに対処する	<ul style="list-style-type: none">・互いへの責任・クラス、学校や地域への責任・気遣い・正義感・参加・イニシアチブを取る・会話に加わり、共に考える・規則を守る・共働する・助けになること	<ul style="list-style-type: none">・寛容・他人の規則や習慣に合わせる・異なる人生哲学や生活スタイルを尊重する・異なる生活状態にある、異なる文化の、他者に共感する・信仰の、意思表明の自由に建設的に対処する・先入観 (vooroordeel) と判断 (oordeel) の間の違い・哲学的（イデオロギーの）潮流の知識	<ul style="list-style-type: none">・民主的な制度（第二議会、憲法など）・民主主義的な行動ルール・民主主義における権利と義務・民主主義の原理（選挙、支持者、議員団）・民主主義におけるメディアの役割
基礎的な個人内の構成要素： <ul style="list-style-type: none">・内省・自信／ポジティブな自己イメージ・自己マネジメント／自分の衝動をおさえることができる／自己コントロール・自分の振る舞いが他者へもたらす効果の理解			基礎的な人間関係の構成要素： <ul style="list-style-type: none">・感情移入／あなた自身を他の立場に置いて考えることができ、考えたい・パースペクティブを変えることができる・他の人の行動や動機の理解・好奇心が強い／他者や何か新しいものに対しオープンである	
積極的で社会的かつ道徳的な雰囲気： <ul style="list-style-type: none">・教師たちは快く働いている・教師たちによる不適格な行動は未然に防がれている・子どもたちは安全に感じている・子どもたちは聞いてもらい見てもらっていると感じている・みんな他者の立場に喜んで立つ・みんな互いに積極的な方法で接している・子どもたち自身の力が活用されている				

フルスクールでは、子どもたちが、自分たちがそこにいることが重要であること、つまり自分たちが「重要である」ことを経験することで、子どもたちにパースペクティブと希望を提供することも重視されている。これらの思想がプログラムの根底にある。

プログラムでは、子どもたちが、図1の5つを学ぶことが目指されている。

1. 民主的な方法で、互いに決定を行う
2. 建設的に衝突を解決する
3. 互いのため、コミュニティのために責任を取る
4. 人々の間の違いに対してオープンな態度を取る
5. 私たちの民主的な社会はどんな原理で整えられているのか

図1 ピースフルスクールプログラムの目標

また、表1では、目標が詳細にコンピテンシーとして記述されている。表1を見ると、子どもレベルの目標だけでなく、教師レベルや学校レベルでの目標も含まれている。また、コンピテンシーとされているものの中には、衝突を解決するための方法といった知識や、実際に仲裁できる、議論できるといった技能、衝突を積極的に解決したいという意味といった態度が含まれている。知識だけでなく、技能や態度も省察のために蓄積される学習プロセスにおいて重要な役割を果たす。子どもたちは、例えば衝突に対処する際の自分独自のスタイルを省察することを学ぶことも求められている。コンピテンシーとは、こうした知識、技能、態度、省察の混合物であると考えられている。

また、民主的なリテラシーが含まれていることから、プログラムの学びをクラスや学校内にとどめるのではなく、社会の仕組みや社会で生きていくことへとつなげることが求められていることがわかる。実際、プログラムでは、学年が上がってくると、選挙の仕組みなどを含め、民主主義についても学べるようになっていく。

こうしたプログラムにおいて、ピースフルレッスンは中核となる。レッスンは、次の6つのブロックで構成されている。このブロックは全学年共通している。毎年同じ内容のブロックを実施することで、発達段階に合わせて、少しずつより深く学べるようにカリキュラムが組まれているといえる。

1. お互いにクラスの一員である
2. 自分たちで衝突を解決する
3. 互いに分かり合う
4. お互いに心を持っている
5. みんな自分なりに貢献している
6. 私たちはみんな違う

図2 ピースフルレッスンのブロック

本稿では、研究の第1段階として、このピースフルレッスンに焦点を当てる。しかしながら、ピースフルスクールは、単なる一連の授業以上のものであることが強調されている。授業は単に重要な1手段にすぎないという。それ以上に、クラスの教師や子どもと関わる学校内の全ての大人が、いつでもどんな状況でもピースフルスクールの思想を日常に適用することが重要であるとされている。もし子どもたちの間に衝突が起きた場合、それを自分たちで建設的な方法で解決してほしいと望むのであれば、教師として自分もそうしなくてはならないと考えられているのである。

また、プログラム導入に際しては、授業の実施以外にも、学校教職員向けの研修やクラス訪問、保護者向けに情報を提供する保護者会やワークショップ、子どものメディアーターの研修等が総合的に実施される。これらについては、先述した先行研究等を参照されたい。

3. ピースフルレッスンの教育方法学的考察

(1) 教育目標

本節では、ピースフルレッスンの教育目標について整理する。表2は、旧ウェブサイト上に示されている各ブロックの内容を表にしたものである⁹⁾。ただし、表2に示されている各ブロックの内容は、本稿で参照している教師用指導書の目標と大きく対応しており、目標と捉えて良いと考えられる。教師用指導書では、学年によって目標記述にやや違いが見られたため、ブロック共通の目標に関する記述と捉えられるものを表2で示した。

表2を見ると、年度の最初に実施されるブロックでは、クラスづくりが行われ、積極的な雰囲気形成やルールづくりとともに、子ども自身が自分たちの役割や責任を考えることが目指される。続いて、ブロック2では、衝突に自分たちで対応できるようになることが目指される。ステッププランというのは、衝突を解決するためのステップを示したものであり、その流れに沿って進めていくことで、子どもたちが自分たちで衝突を解決できるようになっているものである。こうしたピースフルレッスンでの学びを、学校生活で衝突が起きた際には活かすことが期待されている。さらに、ブロック3では、子どもたちがより良いコミュニケーションを取れるようになることが目指されている。これは、衝突の解決だけでなく、衝突を未然に防ぐ鍵であるとも考えられている。

ブロック4では、テーマとして感情が取り上げられ、そこでは、主に自分の感情認識と言語化、他者の感情の受け入れという2つが目指される。ブロック5では、コミュニティの中で積極的に責任を取り、貢献することの重要性を学ぶことが求められる。最後に、ブロック6では、違いに対してオープンであることが目指される。子どもたちは身近な家族やクラス、学校、学校外や世界に

表2 ピースフルレッスンの各ブロックの目標

1	ブロック1（お互いにクラスの一員である）では、クラスの形成やクラス内に積極的な雰囲気を作り出すことに主眼が置かれている。児童とともに、私たちは互いにクラス内でどのように関わるかについて約束を行う。児童自身が任務や責任を考え出す。
2	ブロック2（自分たちで衝突を解決する）では、児童たちは「衝突」という理解を学び、どのように衝突に対応しうるかについての視点(zicht)を得る。このブロックの後、私たちは、児童が、簡単なステッププランを使って、衝突を自分たちで解決することを期待する。
3	ブロック3（お互いに分かり合う）では、コミュニケーションに関心が払われる。良いコミュニケーションは衝突を解決し未然に防ぐ鍵である。このブロックでは、私たちは誤解の役割に特に関心を払う。他者の立場に立ち、気持ちを考え、積極的に聞き、要約することができるようになる。
4	ブロック4（お互いに心を持っている）では、感情が中心となる。このブロックでは、とりわけ衝突解決のための2つの重要な技能が学ばれる：あなた自身の感情を認識し、それについて話すことができる技能と、他者の感情を認め、受け入れる技能。
5	ブロック5（みんな自分なりに貢献している）は、最初の実行の年は、衝突の仲裁についてであり、その後児童の参加が中心となる。
6	ブロック6（私たちはみんな違う）は、違いに対してオープンであることが中心となる。子ども達は家族、クラス、学校、学校外や世界において、類似点や相違点を調べる。

おける類似点や相違点を探る。

これらは、先述したプログラム全体の目標とも重なる点が多い。人はみんな違うという前提をもとに、それでも自身や他者の感情を認め、わかりあい、貢献し合うことで、衝突を防ぐとともに、衝突が起きた際には解決できるように、日々の生活へ活かすことが重視されている。こうしたピースフルレッスンを通じての学びを学校全体で教師とともに体现していくことで、プログラム全体の目標へとつながっていくと考えられる。

なお、ピースフルスクールでは、このような内容と関わる言葉の教育についても重視されている。そのため、各学年、各ブロックごとに子どもたちに示される語彙が整理されている。中には同じ単語が複数の学年にまたがって示されている場合もある。単語には、衝突(het conflict)のようにレッスン内容に直接関わるような単語もあれば、イントロダクション(de binnenkomer)のように指導過程に特有な単語もある。また、日本の6年生にあたる8年生になると、民主主義(de democratie)や候補者(de kandidaat)のように社会の仕組みに関わるような単語も含まれている。

（2）教材・教具

本節では、ピースフルレッスンで使われる教材・教具について取り上げる。教材は、固定的なものが毎回使用されるわけではない。テーマに合わせて、子どもたちが

具体的にイメージしやすいような生活に近い文脈、また子どもたち自身がピースフルレッスンで活動したことなど、子どもたちの生活と関わるものが素材となることが多い。そのため、教具としては、授業で取り上げるテーマに関わる、絵本、新聞記事、テレビなど文脈を再現しうるものや、活動のために必要な素材がしばしば用いられる。低学年の場合には、パペット人形を使って、文脈を教師が再現することもある。

ただし、プログラムに付属している子ども向けのワークシートやピースフルボールと呼ばれる地球儀の形をした布ボール等については、多くの授業で、共通して用いられている。ワークシートには、子どもたちが読む読み物が載っていたり、活動したことを書き込む欄があったりする。また、ピースフルボールについては、子どもたちがサークル状で対話を行う際に、ボールを持っている人が話し、周りの人は聞くというルールを可視化しやすくなる。学校によっては、ピースフルボール以外の物で代用している所もある。

（3）指導過程・学習形態

本節では、ピースフルレッスンの指導過程と学習形態を確認したい。まず、ピースフルレッスンの指導過程は、基本的に次の5つの流れで構成されている。①イントロダクションの遊び、②授業の流れとテーマの確認、③授業のテーマに関する中心的活動、④振り返り、⑤クロー

ジングの遊びである。ただし、教師用指導書には、授業の後に教師が取り組むべき活動が示されており、ピースフルレッスンで学んだことが、授業外でも活かされることが目指されている。

まず、①イントロダクションの遊びについてである。ピースフルレッスンは常に短い、遊びの活動で始まる。これは、長々とするのではなく、本当に短く素晴らしい活動にすることが重要であるとされる。これは、子どもたちにとって、これから国語や算数ではなく自分たちのクラスや自分たち自身に関わることを学習するという合図にもなるという。遊びについては、教師用指導書には、授業ごとに例が示されている。遊びの中には、授業内容と結びついているものもある。そうした場合には、その遊びを行うことが推奨されている。ただし、そうでない場合には、指導書の後ろに掲載されている遊びリストから教師が自由に選んでも良いことになっている。

次に、②授業の流れとテーマの確認である。ピースフルスクールプログラムでは、子どもたちが前もって何を学ぶのかを知らなければ、授業後も何を学んだか分からず、時に自身の発達にもほとんど気づかないと考えられている。そのため、子どもたちがこれから何を学ぶのかを意識することで学習効果が高くなるとされる。そこで、授業の最初には、本授業の流れとテーマが子どもたちとともに確認される。授業を超えて、前の授業では何について学んだのか、ブロック全体では何について学んでいるのか、時にピースフルスクールという学校全体では何について学んでいるのかについても確認することも重要であるという。こうした取り組みは時に形骸化しがちであるが、教師は実際に一種の「関与 (commitment)」を求める。もし子どもから「先週のロールプレイをもう一回やらない？」といった考えなどが出されたら、真剣に取り上げることが求められる。そのことがまさに民主主義の適用となると考えられている。

その後、③授業のテーマに関する中心的な活動が行われる。ここでは、多様な学習形態が用いられる。時に、教師は思ったように対話が進まなければ、対話を長く続けようとする。しかし、長く続ければ効果が上がるわけではなく、短い時間で力強く子どもたちに内容を学んでもらうことも可能である。もし教師が十分ではないという思いを持った場合、必ずしもその時間内で完結させようとする必要はない。ピースフルスクールのブロックやレッスンは繰り返し同じ内容を学べるよう構造化されている。また、全ての学年で同じブロック、レッスンを学ぶため、子どもたちはゆっくり学んでいくことができる。

活動の後には、④振り返りが行われる。ここでは、再度授業の目標に立ち戻り、自分たちが達成したかったことを達成できたのが確認される。子どもは授業を通して何を学んだのかを話すことが求められる。時に、子

どもはただ求められていることを形式的に復唱する。しかし、子どもたちが本当に言いたいことを持てるようにすることが重要である。

最後に、⑤クロージングの遊びである。イントロダクションの遊びと同様に、教師は指導書でその授業用に示されている遊びを行っても良いし、指導書の後ろに掲載されている遊びリストから自由に選んでも良い。この遊びも授業を楽しく終わること、これから他の学びへ移ることが意図されている。

ピースフルレッスン自体は、以上の様な流れで構成されている。ただし、先述したように、ピースフルスクールの取り組みは、授業だけに閉じたものではない。そのため、授業の終わりこそが、学びを実践へと適用するための始まりであると考えられている。実際、指導書には、授業後に「教師が行うべき活動」や、「適用のための提案」が示されている。授業は重要であるが、子どもたちは社会的感情的認識や技能を授業からは学ばないという。子どもたちがあらゆる学習経験を持てるような環境が必要である。教師は、子どもたちが本当に意味のある状況でピースフルスクールについて学べるよう全ての機会を利用するとともに教師自身が子どもたちに学んで欲しい全ての原理を絶え間なく実践へと適用していくことが求められている。

次に、ピースフルレッスンの学習形態である。ピースフルレッスンは、基本的に椅子を丸く並べてサークル状にして行われる。イントロダクションの時から子どもたちはサークル状に座っている。ただし、授業における中心的な活動では、必ずしもサークル状のまま学習が展開されるわけではない。ピースフルスクールはケーガン (Kagan, S.) の協同学習の考え方を取り入れて実施されている¹⁰⁾。指導書には、ケーガンが掲げる4つの原則である①参加の平等性、②個人の責任、③肯定的な相互依存、④相互作用の同時性や、構成的教授法の考え方が紹介されており、それに則って子どもたちの学習形態は考えられている。具体的には、ブロック1～3では常に2つの新しい学習形態が取り入れられ、続くブロックでは様々なバリエーションでそれらが取り入れられる。このように、子どもたちは学習内容だけでなく、学習形態を通じて、協同のあり方を学べるようにも配慮されていることがわかる。

(4) 教育評価

オランダでは、子どもたちの学びをテストなどを通じて継続的に捉えるモニタリングシステムという仕組みが浸透している。ピースフルスクールプログラムの2011年版の指導書には、プログラムで目指される目標がどの程度子どもたちに実現されたかについて個人レベル、学年レベルで評価するモニタリングシステムについて書かれ

ている。しかしながら、2014年のピースフルスクールのニュースレターにおいては、社会的コンピテンシーを「測定」することの困難さから、個々の児童レベルのモニタリングシステムからは手を引いたとされている。代わりに、クラスや学校レベルでの、プログラムの目標の実現度合いや社会的安全性についての質保証システムが開発されたという。

このように子ども一人ひとりの情意面を評価するのではなく、クラスや学校全体で捉えようとする評価のあり方は示唆深い。これにより、評価の結果を子ども一人ひとりの力の「測定結果」と帰するのではなく、教師の振る舞いを含む教育活動の改善に生かしやすいと考えられよう。

ただし、このことがピースフルスクールの教師たちが、子ども一人ひとりの育ちを把握しようとしていないことを意味するわけではない。2015年3月17日にオランダのピースフルスクールで実施したインタビューによれば、その学校では、①日々の子どもの観察、②一人ひとりの子どもとの面談、③いじめられたことがあるかなどを含む安全性についての質問紙という3つの方法で子どもたちの市民性の評価を行っているという。3つめの質問紙が先述したピースフルスクール向けの質保証システムと同一のものであるかについては確認できていない。しかしながら、特別な機会に子どもの変化を「測定」しようとするのではなく、日々の観察等を通じて具体的に子どもの様子が把握され、働きかけに活かされているといえる。

4. 日本での授業案

本章では、日本において、ピースフルスクールプログラムの考え方を基にして、実践された授業案を示す。本来、ピースフルスクールプログラムは学校全体で、全学年で実施するものである。しかしながら、具体的な授業づくりの試行という点で本稿では、1授業に焦点を当てて取り上げる。

本稿で取り上げる授業は2018年2月に、公立小学校第3学年で学級活動の時間を用いて実施された。ピースフルレッスンとしては、3回目の授業である。いずれも授業者は、筆者である萩野奈幹である。これまでの流れとしては、まず、2018年1月に初めてのピースフルレッスンとしてオリエンテーションを行った。授業の流れ、サークル対話のあり方等を「友だちの意見をよく聞いて自分の考えを伝えよう」のテーマを通して授業を実施した。これはブロック1の内容にあたると考えられる。次に、2月に1回目の授業の延長として「みんな同じ!？」をテーマに授業を行った。これはブロック6の内容にあたると考えられる。その上で、後述する本時を行った。詳しくは、次ページの学習指導略案を参照されたい。

本時の目標設定にあたっては、ピースフルスクールプログラムで育成が目指されている目標を参照しつつ、児童の実態に即して、育てたいと担任が願う目標を設定した。また、目標については、授業者だけでなく、児童自身も問題意識をもって自分の課題として捉えられるよう展開を図った。目標の内容は、ピースフルスクールのブロックで言えば、ブロック3の「お互いに分かり合う」にあたる内容であると考えられる。ねらいとしては、「互いに気持ちよく生活するために、気持ちのよい言葉や丁寧な言葉遣いをする事の大切さに気づくとともに、生活で実践しようとする意欲を高めることができる」とした。

教材・教具については、パペットを用いて、子どもたちの実生活の中での問題場面として同級生の絵具を勝手に持っていこうとする場面を再現した。それにより、子どもたちが自分ごととして捉え、問題点や原因について考えられるようにした。また、ピースフルボールを用いて、子どもたちがやわらかいクッションを持つことで安心して話せるようにした。また、クッションを持つことで、話し手・聞き手が明確になり、話し合いのルールが可視化され、他者を意識した話し合いができた。

本時の展開としては、ピースフルレッスンの構造と同様に、①イントロダクションの遊び、②授業の流れとテーマの確認、③授業のテーマに関する中心的活動、④振り返り、⑤クロージングの遊びとした。このようにイントロダクションとクロージングの遊びを取り入れることで、子どもたちの気持ちがほぐれ、ピースフルレッスンへの学びに向かいやすくなっている様子であった。また、授業の流れとテーマの確認のところでは、授業の流れとともに「互いに気持ちよく過ごせるよう、ていねいな言葉の使い方ができるようにしよう」とめあてを提示し、子どもたちが学習の見通しを持てるようにした。中心的活動のところでは、丁寧な言い方を考えるだけでなく、即興的な動作化を通して、どうして丁寧に言うことが良いのかという理由も考えられるようにした。それにより、自分の考えを言葉で伝え、互いに分かり合うことも大切にした。また、子どもたちが丁寧な言葉を使うことの大切さとともに、友人との違いといった多様性にも気がつけるよう意識した。これらは、ピースフルスクール全体で重視されていること、他のブロックでの学びにもつながることであるだろう。

学習形態としては、サークル状での対話を取り入れた。これにより、教師も子どもたちも同じ目線で、全員が互いの顔を見て対話ができるようになった。普段、話すことが苦手な子どもも話しやすくなっている様子が見られた。サークルは、非日常的な学習形態であり、子どもが主体的に参加しようとする仕掛けとしても有効であると考えられた。なお、今回は、サークルで座って話すとい

3. 本題材のねらい

4. 本時の展開

4. 事後の指導

- 155

うことに慣れることを優先し、今回は必ずしもケーガンが重視していたような協同学習の形態は活かしていない。ただし、一部の子どもだけが活動に貢献するといった形にはならないよう、全ての子どもたちが同じように参加できるように心がけた。

教育評価としては、授業を通じて子どもたちの様子を把握するとともに、子どもたちの振り返りを参考にした。また、授業後には本時の内容を活かしてほかほかした言葉を使う「ほかほか週間」をクラスで1週間設定した。こうした「ほかほか週間」における子どもたちの行為についても観察することで把握に努め、教育評価の参考にした。

このようなピースフルレッスンを通して、子どもたちが自ら具体的に言葉遣いについて考えるようにすることで、子ども自身が自分の振る舞いが他者に与える影響について気づけるようになって考えられる。こうした授業が一過性のもので終わらないよう、ピースフルプログラムで推奨されていたように、教師としても子どもたちへの言葉遣いを振り返ると共に、授業後も子どもたちが生活に活かしていけるような指導を心がけた。

5. おわりに

本稿では、オランダのピースフルスクールの授業づくりを教育方法的に考察することで、日本における授業づくりに活かす足がかりを得ることを目的としていた。そのために、教育目標、教材・教具、指導過程・学習形態、教育評価の4つの視点でピースフルスクールの授業づくりについて考察を行い、それぞれにおいて重視されていることを整理した。その上で、1つの試みとして、日本での授業案を提案した。その結果、日本での実践にあたってのポイントや留意点として、次の3点が指摘できると考えられる。

1点目は、ピースフルレッスン実施のためには、パペットやピースフルボールを使えば良い、授業の流れをピースフルレッスンの通りに行えば良い、といった形式だけ真似をすれば良いわけでは決してなく、ピースフルレッスンの理念を参照しつつ、子どもたちに願う姿をもとに授業を柔軟に組み立て、子どもたちの生活とつなげていくことが重要であると考えられる。

2点目は、1点目とも関わるが、特定の価値を教え込もうとするのではなく、一人ひとりに違いがあることを尊重しつつ、共に生きるあり方を学べるようにするという理念をもとに、参考にできる枠組みを参照するという点である。ピースフルスクールでは、ピースフルレッスンだけでなく、生活コミュニティとみなされるクラスや学校での学びも重視されていた。子ども達は、特定の価値を教師から与えられるのではなく、授業やコミュニティにおいて「民主的な市民」であるとは、何を意味するの

かを経験的に学ぶことが大切にされていた。

3点目は、子どもたちだけでなく、教師自身も子どもに求める振る舞いを日々の指導の中で体験できているかを自問するという点である。ピースフルスクールでは、もし子どもたちの間に衝突が起きた場合、それを自分たちで建設的な方法で解決してほしいと望むのであれば、教師として自分もそうしなくてはならないと考えられていた。

以上のような形で授業づくりを行うことによって、オランダのプログラムの理念等を尊重しつつ、日本の子どもたちに合う授業づくりの道が開かれるように思われる。

しかしながら、本稿では、研究の第1段階として、ピースフルレッスンの1授業にしか焦点を当てられていない。そのため、実際のピースフルスクールのように、学年を超えて長期的に実施するあり方までは十分に示せていない。また、ピースフルスクールが、単なる一連の授業以上のものであることが強調されていることを考えれば、授業外での取り組みや保護者を巻き込んだ取り組み等についても検討していく必要がある。これらについては、今後の課題としたい。

註

- 1) ピースフルスクールの旧 website [<http://www.devreedzameschool.net/vreedzameschool201425/wat-is-dvs/wat-is-de-vreedzame-school-3>] (2018.04.23確認)。
- 2) リヒテルズ直子『オランダの共生教育－学校が＜公共心＞を育てる』(平凡社、2010年、pp.91-128) 他。
- 3) 奥村好美「オランダにおける市民性教育を通じた学校改善－ピースフルスクールプログラムに焦点をあてて」『教育目標・評価学会紀要』第26号、pp.21-30。
- 4) 熊平美香「連載 教育と学習のイノベーションを探る⑨ 日本版ピースフルスクールプログラムの取り組み」(『文部科学教育通信』No.349、2014年、pp.26-27) や熊平美香、福岡史『ピースフルスクールプログラム－主体性・多様性・協働性を伸ばす。内省する力を育む。－』(東洋館出版、2017年) 他。
- 5) 授業づくりの問題領域については、石井英真「授業設計の基礎・基本」(田中耕治編著、高見茂、田中耕治、矢野智司監修『教育方法と授業の計画』(教職教養講座 第5巻) 協同出版、pp.51-65) によってまとめられているものを参照。
- 6) ブロックとは、単元のような学習内容のまとまりを指す。
- 7) ピースフルスクールの新 website [<https://vreedzaam.net/actueel-nieuws/item/424-een-vernieuwwd-blok-6-in-het-deelnemers-domein>] (2018.04.23確認)。
- 8) 本章および次章の内容は、明記しない限り、教師用指導書第4版(2011年版)の次の箇所を参照。Leo

Pauw & Jalob van Sonderen, *Handleiding De Vreedzame School: Demovratie moet je Leren!*, Eduniek: Maartensdijk, 2011, pp1-17.

9) ピースフルスクールの旧 website

[<https://www.devreedzameschool.net/vreedzameschool201425/basisonderwijs-1/lessenserie-2/30-praktijk/kosten/79-lessenserie0103inhoud>] (2018.04.23確認)。

10) 教師用指導書で参照されている協同学習についての文献は、全てオランダ語翻訳版であり入手困難であるが、そのもととなる英語版は次のような文献等であると思われる。

S. Kagan & M. Kagan, *Kagan Cooperative Learning*, San Clemente: Kagan Publishing, 2009.

筆者は同書の前の版しか入手できなかったが、そこでもケーガンが掲げる4つの原則につながる原則等が示されている。